

## 根元的虚構論と関連性理論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西田谷, 洋 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/7142">http://hdl.handle.net/2297/7142</a>

# 根元的虚構論と関連性理論

西田谷 洋

## 一、認知科学における関連性理論の位置

関連性理論は、人類学者ダン・スperlベルと言語学者ダドリー・ウィルソンの二人によって発表された。従来の記号論的な儀礼研究では象徴から釈義を生み出すのは種々雑多な規則であり、研究者の直観によっていかなる解釈も可能となる。それに対し、スperlベルは、ジェリー・フォーダーの計算主義的認知科学の基本的発想を取り入れ、象徴的知識を呼び起こす認知的装置に関する認知的モデルを提示した<sup>(1)</sup>。また、ウィルソンは生成文法派だが、伝達や言語変化といった言語運用的な側面にも関心を持ち、一九七九年の時点で既にグライスの会話の公理の中で関連性を重視して語用論的発話解釈の検討を行っていた<sup>(2)</sup>。この二人の出会いによって一九八六年に誕生した関連性理論は、それゆえ言語コミュニケーションの領域で先行するコードモデルと会話の公理を批判し、関連性と認知を結合させ、記号表示・記号操作の情報処理を前提とする演繹的推論のメカニズムで発話生成・解釈を規定する理論モデルを構築することになった。

関連性理論は、認知科学的な言語研究だ。では、一般に認知言語学と呼ばれるアプローチとはどういう関係にあるのだろうか。

今井邦彦氏は、関連性理論を「認知の学」・「経験科学<sup>(3)</sup>」としつつ、認知言語学を「解釈学<sup>(4)</sup>」だと規定する。今井氏は、言語使用の根幹には、言語機能・言語能力の場合と同様、「亜人格的原理が存在する」と考える。関連性理論は、当初、発話解釈過程はモジュールではなく、汎用的な中心的認知システムが司ると設定していたが、第二版ではモジュール説に転じた。つまり、現在の関連性理論では、後掲する関連性の原理の第一原則（認知）と第二原則（伝達）は、前者が心の認知機構に関与し、後者はその中の特殊な発話解釈モジュールを支えているという構図となっている。モジュールの特徴は、フォーダーによれば<sup>(5)</sup>、①領域特定性、②情動的莖膜性、③遺伝的決定性からなる。関連性の原理が専ら関連性の同定に関わるため、関連性理論の枠組みでは発話解釈のメカニズムは領域特定のとなる。また遺伝的決定性は、言語機能が存在するゆえに、人は「生得的に関連性を最大にするよう性格づけられている」という帰結もたらされる。次に、情動的莖膜性とは、一つのモジュールは他の情報源からの情報を利用し得ないということだ。しかし、解釈に当たって様々な筋からの情報を利用することを、今井氏は「語用論的錯覚」として斥けるが、明らかに説得力に欠ける。

関連性理論は、認知科学第一世代の情報処理モデルに依拠している。情報処理モデルは、心のプロセスをコンピュータの情報処理プロセスと同一視し、そのプロセスは命題的な分節構造をもつ表象によって表示され、形式的な計算の過程として規定されるという表示主義・計算主義のパラダイムを構成する。

それに対し、認知言語学が依拠するメンタル・モデルは、外部世界の主体的な解釈と意味づけ、外部世界のカテゴリー化と拡張、環境・社会との相互作用、五感、空間認知、運動感覚をはじめとする身体的な経験に根ざす、広範な認知能力を問題としている。日常言語の発話解釈には、コンテキストや言語外の知識にかかわる情報を背景にして、話し手の意図する意味を推測していく発見的な推論のプロセスが密接にかかわっている。認知言語学では、この広義の認知能力の観点から、こうした言語現象を動的に捉えていくアプローチをとることになる。

この点で、文学研究への有効な認知科学アプローチは、認知言語学の導入を待たねばならない。しかし、その前に、文学研究において関連性理論が開示する可能性に今一度触れておかねばならない。構造主義・分析哲学が依拠する厳密な一致によって機能するコードモデルから、関連性理論の類似性をもたらす推論モデルへの転換は、より文学テキストの動態に対応した記述を可能にしてくれるからだ。そのために、本稿では、関連性理論の概要をまとめつつ、根元的虚構論の問題点を論じることとする。

## 二、関連性理論と虚構テキスト

関連性理論は、発話解釈を可能とする人間の認知のメカニズムの解明をはかる語用論の一つだ。人は、常に自己の頭の中の想定を増加・訂正・確定したいという欲求を持つ。人は、そうした想定 of 総体である認知環境の改善を望んでいるとされる。認知環境の改善をもたらすことを認知効果を持つと言うとすれば、関連性理論で関連性があるというとき、それは認知効果を持つことと同値だ(1)。この人の関連性志向を示すのが関連性の原理の第一原則である認知原則(2a)だ。(2a)は、一般的で漠然としており、伝達原則である第二原則(2b)によって、言語の動態に対応することが可能となる。なお、(2b)の最適な関連性の見込みとは(3)を指す。

- (1) 関連性を持つ≡認知効果を持つ<sup>(6)</sup>
- (2a) 人間の認知は、関連性が最大になるようにできている。
- (2b) すべての意図明示的伝達行為は、それ自身の最適な関連性を見込みを伝達する<sup>(7)</sup>
- (3a) 意図明示的刺激は受け手がそれを処理する労力に見合うだけの関連性がある。
- (3b) 意図明示的刺激は伝達者の能力と優先事項に合致する最も関連性のあるものである。(RT2:331)

(2)が示すように、関連性理論は、言葉の解釈は、伝達と情報処理の効率性の観点からみて発話の関連性を最大限にするように機能するという関連性の原理を基本とする。

関連性理論の発話解釈は、文脈効果が大きいほど関連性が高くなり、効果を得るための情報処理の負担が小さいほど関連性が高くなるという関連性の原則の存

在を前提とする。関連性理論では、与えられた発話は、すでに与えられている想定を、①強化する場合、②キャンセルする場合、③文脈的含意をもたらす場合に、関連性をもつとされる。

関連性理論では、発話の語用論的解釈は推論操作で規定される。この操作は、発話内容と文脈を構成する想定で規定される概念表示に適用される。関連性理論では、発話の解釈は、基本的に表意と高次表意の確定、さらに発話解釈に基づく推意の確定の手順にそってなされる。この種の意味の確定のうち、表意は、言語的にコード化された意味表示（ないし論理形式）で特徴づけられる文の①曖昧性の除去、②指示付与、③省略要素の補充と必要な情報の付加・特定化による拡充の手順によって規定される。さらに、高次表意は、命題的態度、発話の力等の復元によって規定される。

関連性理論では、推意は、この種の手順を介して得られた表意、高次表意を明示的に反映する発話の表示レベルと発話文脈によって規定される想定を表示レベルに、しかるべき推論規則を適用することで算定される。

虚構テキストにおける関連性を、スペルベル&ウィルソンは、次のように説明する。

関連性の根拠である認知効率の概念は、一見、真性の概念を切り離せない。だが、システムは「自身の入力と内部の処理過程によって以外、真の想定と偽の想定を区別する方法をも」(RT2:322)たず、「自身の手順が相俟って知識を伝えるはずだと考えること」しかできない。このため、システムは、「自身の諸機構の出力を認知的に保証されたものとみな」し、「達成されたすべての文脈効果によって関連性を査定する」(RT2:322)ため、真性は無視することができる。虚構テキストに関連性が存在するのは、言い換えれば、虚構テキストの読者の認知システムにおいて認知効果が生じるのは、入力の実性ではなく、出力の実性によってだ。人は、「自分の認知目標に役立つということがなければ文脈効果自体に興味をもつ」(RT2:324)ことはない。

この説明からは、関連性理論は、読者側からの解釈理論として捉えられる。ただし、関連性理論は、内容、文脈・認知効果全てを操作・制御するのは作者であり、テキストに対する作者の責任は非常に大きいと考えている<sup>8)</sup>。関連性理論は、言語運用の主体を現実の話し手として捉えており、文学テキストの詩的效果を設定する者も現実の作者として捉えている。

小著『語り寓意イデオロギー』(翰林書房二〇〇〇・三)では、関連性理論を物語伝達の記述理論として使用した。だが、従来の物語論をめぐる研究の蓄積からすれば、関連性理論の作者の表現としての語りテキストという構図は余りに大味な理論構成に過ぎるように思われた。個々の会話場面での適用もさることながら、虚構レベルでの表現主体を想定することによって、物語伝達の妥当な説明が始めて可能になると考えた。『語り寓意イデオロギー』では、物語伝達を、受容モデルとしてではなく相互作用モデルとして捉えるための土台作りとして、そのように理論変更を加えて関連性理論を使用した。むろん、この理論変更は今一度

再考されねばならない。また、現在の関連性理論は、伝達機構を、初期の汎用的な中心的認知システムではなく、生得的で自律したモジュールとして考え、生成文法の枠組みに回帰している。『語り寓意イデオロギー』で提唱した「物語論の認知的転回」とは、物語論を身体的な視点に立つ認知言語学の枠組みで組み替え、物語の表現と理解の規則、語り論のテキスト分析を支える理論的構図を記述することを意図していた。このため、使用する関連性理論も認知言語学と比較的接続しやすい初期の立場を選んできた。だが、関連性理論の現在の立場では、これも再考が必要になる。いずれにせよ、『語り寓意イデオロギー』で唱えた「物語論の認知的転回」とは、概ね関連性理論に基づく文学の認知的研究に他ならない。

一方、近代文学研究において認知を標榜するアプローチには、文芸学の認知的段階を唱える中村三春氏の根元的虚構論がある。根元的虚構論は、あらゆる言語活動はすべて虚構であり、意味の確定はフレームに依存するがフレームの完全記述はできないとし、小説におけるフレーム問題の顕在化として太宰治のメタフィクションを捉え返す、テキスト分析における優れた理論的達成だ。だが、根元的虚構論には、その有効射程とともに限界もまた存在する。

関連性理論の考え方では、テキストは、送り手の伝えたいことの全てを表現しているわけではない。こうした説明原理として想定されるのは、送り手・受け手双方の努力の節約だろう。テキストには、本来伝えたいことの全てを表現する力がない。中味は文脈から受け手にはある程度推測がつくのでわざわざ言語化する努力はしないし、それを全て明示化すれば、受け手の負担となる。これはテキストの「意味確定度不十分性」と呼ばれる。また、関連性理論が、従来の言語研究の中で暗黙裡に、あるいは公式に認められてきた見方(4a)を廃し、(4b)の見解をうち立てたことにも注目したい。

(4a) 発話とは話し手が真だと信じることを、正確無比に表示したものである。

(4b) 発話とは、誰かが真だと信じていることを、さまざまな類似性を以て表示したものである。

関連性理論が提示する意味確定度不十分性の捉え方と伝達観の転換を結びつけるならば、根元的虚構論は再考が要請されるだろう。

### 三、根元的虚構論の展開

中村三春『フィクションの機構』(ひつじ書房一九九四・五)における認知的文芸学とは、<sup>(10)</sup>計算論的物語論と<sup>(11)</sup>様相を異にするものの、やはり認知科学における表示主義・計算主義に対応するように思われる。

根元的虚構論は、世界から意味への人為的・文化的写像函数である真なるヴァージョンによって世界が制作されるとする。虚構の正しい記述は、ネルソン・グッドマン<sup>(12)</sup>によるタルスキの規約Tの改訂(5)によって真の真理値を得たときに可能となる。

(5) Xがvに照らして真であるのは、vに照らしてpときまたそのときに

限る。ただし  $v$  は真なるヴァージョン<sup>(13)</sup>

根元的虚構論は、(5)を掲げる点で、関連づけの真理条件の基盤を維持する相対的相対主義に立つ。根元的虚構論は、真理条件意味論に基づく虚構テキストの分析において、論理的帰結として構成性原理を理論的前提とする。ゴットロープ・フレーゲによって提唱された構成性原理、いわゆるフレーゲの定理は「全体は部分の合成からなる」という考え方だ。規約(5)は個々の要素の写像関係を扱う以上、虚構テキストを個々の部分に分割して分析することになるからだ。とするならば、そうした要素の集合として虚構テキストが構成する以上、虚構テキストの意味はその表現の各部分の意味を合成することによって決定される。また、根元的虚構論は、虚構テキストへの真理値付与からの理論的帰結として、虚構テキストに関わる指示対象の集合と、テキストを指示対象と結び付ける規則からなる可能世界と呼ばれる集合論的なモデルを必要とする。世界はその都度、あるヴァージョンすなわち語り方・記法に従って言明されることで制作される。ヴァージョンは言明間のつき合わせや既存の真理との照合によって検証されるが、世界を語るヴァージョンは複数存在することから世界も複数のとなる。可能世界は、現実と虚構をヴァージョンの違いとすることで統合的に捉えることに寄与している。その故に、根元的虚構論は、「清浄なる不潔・安西冬衛『渴ける神』の可能世界」(『山形大学紀要(人文科学)』一九九五・一)等の可能世界虚構論を理論装置に組み込むことになる。

根元的虚構論に基づく形式意味論的なアプローチの利点は、数学的な厳密性にある。語の意味からテキストの意味まで一貫した定義で論じることができると予測されている。だが、語や文の真理値の集合がテキストの真理値ではないし、仮にテキストの真理値が確定したところで、テキストの意味が分かったことになるわけではない<sup>(14)</sup>。テキストの意味とは、真理値あるいは概念表示だけではなく、送り手と受け手の相互作用から作り出される意味と考えられる。とするならば、根元的虚構論は、意味におけるテキストと世界の関係、伝達へのとらえ方、分析適用等の点で問題を抱えている。

意味におけるテキストと世界の間を単純化して説明しよう。もともと形式意味論が捉える意味に関与するのは、テキストと可能世界だ。これを図式化すれば、(6a)となる。

$$(6a) \quad T \longleftrightarrow W$$

(6a)には、テキストの制作・使用者であり、世界の認識者である人が入り込む余地がない。もちろん、根源的虚構論がそれら一般的な形式意味論と異なるのは、可能世界を指定するための  $f$ 、すなわちフレームを  $T$  と  $W$  の間を媒介する装置として組み込んだ点にある(6b)。

$$(6b) \quad T \longleftrightarrow f \longleftrightarrow W$$

テキストと世界にのみに限定し単純化して説明を続けよう。関連性理論ならば、この位置には  $i$ 、すなわち個々の認知環境に依存した話し手の発話意図とそれに関わる想定が入る(6c)。

$$(6c) \quad T \leftrightarrow i \leftrightarrow W$$

認知言語学ならば、hは世界の認識者としての人間であり、人間の身体と経験に基づいて世界をカテゴリー化する(6d)。

$$(6d) \quad T \leftrightarrow h \leftrightarrow W$$

なるほど、(6b)と(6c-d)は構造上同一だ。だが、両端の要素の関係が(6b)は厳密な一致を前提とするのに対し、(6c-d)は類似性として捉えられるだろう。この点は、理論構築に重要な方向性の違いをもたらすことになる。

ところで、可能世界虚構論には、根元的虚構論以外に、三浦俊彦氏の虚構实在論もある。三浦氏の虚構实在論は、デビット・ルイスの可能多世界説をベースにしたロバート・スタルネイカーのメイクビリープとしての可能一世界説に基づいている。すなわち、テキストと世界の関係は、「一つの美的対象を一つの可能世界に対応<sup>(15)</sup>」させ、全体として「多数の(現実)世界に多数の虚構世界が一一対対応している<sup>(16)</sup>」というものだ。虚構实在論では、「虚構作品の内容秩序が作者の行為に先立って实在している<sup>(17)</sup>」と考える。

一方、根元的虚構論は、「虚構に関する論議はすべて、そこに言葉がある、という単純な事実から発し<sup>(18)</sup>」ていると言うように、テキストから可能世界を構築する方向が基本線とされるだろう。すなわち、根元的虚構論は、その理論的帰結として、テキストの真理値は、テキストから構築される可能世界によって判定されるという、循環論的構造の様相を呈している。

これに対し、跡上史郎氏は、「与件としてのテキストを、そのテキストに先行すると想定されるなにかから根拠づけようとする態度<sup>(19)</sup>」を批判し、テキストの起源とされるものは「テキストと読者の相互作用の結果として錯視される物語内容の一つだ<sup>(20)</sup>」と指摘する。跡上氏の批判は、直接的には三浦氏や小森陽一・金子明雄<sup>(21)</sup>両氏に向けられたものだが、根元的虚構論が可能世界との対応による真理値の確定を必要とする限り、半ば根元的虚構論にも向けられていると言わねばならない。

当然のことながら、実際の中村氏のテキスト分析では(5)が前面に出ることはない。また、論理式が使用されるのも直喩等の極小断片の分析に限られる<sup>(22)</sup>。これは、虚構テキスト分析では構成性原理が機能しないためだ。(5)の連鎖適用による意味合成だけではテキストの意味を作り出すことはできない。このため、氏の分析では、テキストに対応する全体性の図式がトップダウン的に必要となる。フレームはこの図式をも選定する。しかし、日常言語の非形式推論を論理言語による形式推論で捉える根元的虚構論からはフレームの厳密な規定は不可能となり、フレーム問題が生じてくることになる。ただし、形式推論が人の関わる対象から人間の要因をできるだけ排除するという志向性に立っていたのに対し、認知的な非形式推論では、人がそれとどう関わるのかという形で、焦点を人の側に移すことになる<sup>(23)</sup>。虚構テキストは、人の営みを通じて成立し、人の営みの中で運用され、場合によっては変化していく。このため、虚構テキストへの認知的なアプローチでは、主体主義的な立場、すなわち主体の身体性、それと環境との相互作用、それらの

経験を通じて、概念体系が構築され、それを比喻という営みを通じて拡張していくことで、虚構テキストの生成・受容を捉えていくことになる。『フィクションの機構』における根元的虚構論のスタンス、フレームの扱いでは、その点が不十分なままのように思われる。

第二に、伝達は、根元的虚構論が基づく真理条件意味論や（ポスト）構造主義記号論の理論的射程では決して捉えることのできない問題構成だ。表現・表出・媒介等としての伝達は、テキストの言語情報と主体の心理情報との対応を必要とする。中村氏は、「だが言語情報と主体の真意との同定は、主体の真意なるものが言語情報による以外ないために、厳密には不可能というほかはない。あるゆる表現活動は、表現された瞬間に消滅し、後に残るのは文字痕跡でしかない。（略）コミュニケーションとは、本来、痕跡と痕跡との間の不断かつ終わりのない同定作業の連続であり、これを便宜的に、行為・結果・表情等の非言語情報を動員して、ある慣習的な水準を満たせば十分なものとしてプラグマティズム的に処理し、そのような慣習を〈伝達〉と称しているのが日常言語」<sup>(24)</sup> だとして、ヤーコブソン等の伝達観を批判する。これは、テキストからメッセージひいてはイデオロギー性や権力関係を抽出することのみ意義を見出す傾向への歯止めとしては、一定の有効性を持っていたと言えよう。この批判は、コードモデルに基づく批判だ。この立場では、送り手と受け手の間でコードが共有されない以上、発話から送り手が符合化した発話の意味や送り手の真意には到達することはできない。その故に伝達の成功を研究対象ではない慣習の領域に排除することで、根元的虚構論は、理論的安定性を確保することができた。しかし、代案として、例えば、マトゥーラナ&ヴァレラ<sup>(25)</sup>の「方向づけ」としての伝達観が提示されているが、それに基づく分析がなされているわけではない<sup>(26)</sup>。当然の帰結として、メタコミュニケーションの顕在化、自己状況設定の強化、虚構性の自己暴露を形態的特徴とし、自己言及のパラドックスによるメッセージの無根拠性の開示によるアンチ・コミュニケーションを体現するジャンルとして措定されるメタフィクション観もまた、コードモデルに依存している。コードモデルの破綻がメタフィクション論を支える理論的根幹だ。だが、コードモデルの不可能性は、メタフィクションだけではなく、日常言語一般の問題だ。伝達の達成は、コードモデルと推論モデルを併用することで実現される<sup>(27)</sup>。予めメッセージが確固たるものとして存在しているわけではなく、意味確定不十分なテキストをコードと推論によって生成・受容する過程において、類似性が伝達の根拠性のある程度補強することで、コミュニケーションは成立する。さらに言えば、会話分析の知見をふまえるならば、メッセージの伝達は必ずしも必要ではなく、コンタクトの維持・形成がなされている点でコミュニケーションは成立していると思わなければならない。

根元的虚構論では、テキスト分析の心的プロセスをコンピュータの情報処理プロセスに親近性を持つ真理条件意味論の論理計算と同一視する理論的前提を持ちつつ、実際の運用にはテキストは命題的な分節構造をもつ表象ではない

ため、概念図式と対象の相対性が自覚され、脱構築が図られることになる。すなわち、根元的虚構論は、表示主義・計算主義を突き詰めてその不可能性に到達したアプローチではないだろうか。

#### 四、関連性理論の射程

だが、本稿冒頭でも述べたように、関連性理論には表示主義・計算主義に基づく欠陥がある。批判の詳細は山梨正明氏の論考<sup>(38)</sup>に譲り、本稿では、欠点を整理しておくにとどめる。

第一に、文脈効果の認定の不充分さがある。文脈含意・強化・矛盾という文脈効果の区別は厳密を欠く。例えば、数え歌等の定型的反復類型テキストに見られる、意味が文脈と相互作用しない保留も効果としては考えられる。関連性理論は、認知言語学と異なって、意味理解の経済的効率に関わる理論だ。コミュニケーション維持による伝達の無理解のため、理論的安定性を維持し、保留を排除している<sup>(39)</sup>。また、これら文脈効果は、強い推意に限定されている。だが、日常言語では認知効果を考慮した場合、強い推意と弱い推意の違いは相対的だ。このため、文脈効果を強い推意に限定する試み自体、この種の推意の強弱の相対性との関連で問題となる。

第二に、意味解釈プロセスの裏付けの欠落がある。語りテキストは、省略や曖昧性に満ちており、意味内容が表層レベルに十全に反映されている保証はない。関連性理論で用いる論理形式は、統語論レベルでのそれと語用論レベルでのそれが共存しており、しかも単層・復層のどちらに位置するのかも不明確だ。この帰結として、語りテキストに見られる複合的な構文では、論理形式→表意→高次表意→推意といった関連性理論の想定する手順通りには予測できない場合がある。また、論理形式から表出命題を規定する際の省略・削除がどのように文脈に依存し、あるいはしないのかが曖昧になってしまう。さらに、関連性理論では、意味の曖昧性と漠然性の位置づけは、表意レベルと推意レベルにおいて異なるが、語りテキストの表現には、一義化が不可能な漠然性で特徴づけられる表現が広範に存在する。しかし、現時点では、概念表示と推論の算定プロセスに、言葉の曖昧性と漠然性がどのような関係で関与しているかが明らかにされていない。

第三に、関連性理論の論理構造は、言語的知識と百科事典的知識の二分法に見られる二値理論となっている。しかし、これは形式と意味の区分に代表されるモジュールの自律性を前提としており、語りテキストの表現はいずれか一方の機能を担うという風にカテゴリー化されることはない。

関連性理論では、発話文の論理形式に反映される意味から、復元のプロセスを介して表意等を決定していく手順をとる。そこでは、意味解釈のプロセスに関する概略的な規定はなされているが、具体的な言語事象の細部の意味の復元にかかわる認知プロセスの明示的な規定はなされていない。これに対し、認知言語学の参照点起動の推論モデルは、意味解釈を特徴づける認知プロセスの一面の明示的

な規定を可能とし、言語能力と非言語能力を自律的に区別する「心のモジュール」説と記号表示・記号操作の情報処理のパラダイムを前提とする演繹的推論のメカニズムは前提としていない。このアプローチでは、トップダウン的な計算システムの能力ではなく、外部世界の情報の一部を参照点としてターゲットを探索していく人の認知能力の一種として位置づけられる。

認知文学研究は、認知言語学を導入する、この地点から始まる。

- (1) 福島真人「儀礼とその積義」(『課題としての民俗芸能研究』ひつじ書房一九九三・一〇)、及び拙稿「民俗の言説」(『国語研究』一九九七・三) 参照。
- (2) スミス&ウィルソン『現代言語学』(新曜社一九九六・一) 参照。
- (3) 「関連性理論とはどういう理論か」(『英語青年』二〇〇〇・一〇) 五頁。
- (4) 「関連性理論とはどういう理論か」六頁。
- (5) 『精神のモジュール形式』(産業図書一九八五・三) 参照。
- (6) 「関連性理論とはどういう理論か」三頁。
- (7) スペルベル&ウィルソン『関連性理論〔第二版〕』(研社一九九九・三) 三一―八頁。以下、同書からの引用は(RT2:頁数)として示す。
- (8) 「関連性理論とはどういう理論か」四頁。
- (9) 「関連性理論は認知・言語の研究に何を寄与しうるか?」(『学習院大学言語共同研究所紀要』二〇〇〇・一二) で、松井智子氏は、「話し手の方はどうかということ、content, context, cognitive effect すべてを、manipulate、コントロールすることができるわけで、関連性理論は発信者である話し手の責任というのは非常に大きいというふうに考えておきまして、発話をきちんと理解してもらうために、話し手はこの3つの要素をできるだけmanipulateするほうがいいという立場をとります。」(一六九頁)と発言している。
- (10) もっとも中村「テキストの認知論に向けて」(『ユリイカ』一九九八・一〇) は、根元的虚構論に認知言語学を接続することを予告しており、比喩等のレトリックによる統辞連鎖の様式論として構想されている『様式とメタファー』では異なるアプローチをとらなければならない。
- (11) 計算論的物語論は、拙稿「小方孝『物語生成』」(『物語研究会会報』二〇〇一・九予定) で批判した。
- (12) 『世界制作の方法』(みすず書房一九八七・一〇) 二〇四頁。
- (13) 『フィクションの機構』二七頁。
- (14) 今井『語用論への招待』(大修館書店二〇〇一・二) では、真理条件意味論の「考究対象は、「使用」から切り離された言語形式そのものが持つ意味であり、そこには語用論的要素は一切含まれない」(一四六頁)と指摘する。真理条件意味論で自然言語テキストを扱うのは無理がある。
- (15) 『虚構世界の存在論』(勁草書房一九九五・四) 三一―八頁。

- (16) 『虚構世界の存在論』三二六頁。
- (17) 『虚構世界の存在論』六四頁。
- (18) 中村「可能世界虚構論の可能性」(『未発』一九九五)一六頁。
- (19) 「『草迷宮』と『吉野葛』をあわせて論ず」(『日本文化研究所研究報告』一九九六・三)八〇頁。
- (20) 「『草迷宮』と『吉野葛』をあわせて論ず」八二頁。
- (21) 跡上氏の批判は、間接的には中山昭彦・藤森清各氏の仕事を始め、虚構内コミュニケーションを扱う語り論全てに及ぶ。虚構内コミュニケーション論議を物語内容論として斥ける跡上氏の批判では、根元的虚構論はコードモデルを極限にまで突き詰めたものであり、『語り寓意イデオロギー』は推論モデルをそれに交替させたものということになる。ただし、小著が、文学コミュニケーション・モデルの更新のために虚構内コミュニケーションを場として選んだことは断っておきたい。なお、氏の「テキストと読者の相互作用」という読者論モデルに代えて、別稿では認知的・語用論的な言語行動モデルを提示したい。
- (22) 中村「“争異”するディスコース」(『国文学』一九九四・四)参照。
- (23) ジョージ・レイコフ『認知意味論』(紀伊国屋書店一九九三・一)参照。
- (24) 『フィクションの機構』七四頁。
- (25) 『オートポイエーシス』(国文社一九九一・一〇)参照。
- (26) これに対し、跡上「『道化の華』の方法」(『文芸研究』一九九四・一)は、テキストの「ほんたう」への「方向づけ」の機能を論点とすることで、マトウラナ&ヴァレラ的な伝達観に対応していると言えよう。
- (27) 『関連性理論〔第二版〕』二八～三三頁参照。
- (28) 山梨正明「関連性理論のアプローチの批判的検討」(『英語青年』二〇〇〇・一〇)・「認知言語学からみた関連性理論」(『学習院大学言語共同研究所紀要』二〇〇〇・一二)参照。
- (29) 野村真木夫『日本語のテキスト』(ひつじ書房二〇〇〇・一一)一〇〇、一八八頁参照。
- 付記 本稿には拙稿「〈推論と伝達〉再考」(文化史研究会『会報』二〇〇一・四)を溶解している。

(一九九四年三月修了)